

# 日本におけるオルテガ思想の初期受容

— その過程と要因に関する一考察 —

Primeras recepciones del pensamiento de José Ortega y Gasset en Japón  
— Una consideración sobre su proceso y sus factores —

木 下 智 統

Tomonori KINOSHITA

## 1. はじめに

ホセ・オルテガ・イ・ガセット (José Ortega y Gasset 1883-1955) は、日本でもその名を知られた20世紀のスペインを代表する哲学者、思想家である。1936年にオルテガが日本で紹介されて以降、今日に至るまで数多くの研究書、研究論文等が発表されてきた。その内容も多岐に亘っており、オルテガの思想の広がりや裏付けるものとなっている。そのオルテガが初期段階において、日本でどのように受け入れられたのか、その過程と、なぜ研究者たちはオルテガの思想に魅力を感じたのか、その要因について追っていくことが本論考の目的である。このため、本論考では時系列的に各々の研究者について取り上げ、丹念な検討を行った。なお、初期段階の受容を研究目的とするため、オルテガに関する日本で最初の論文が発表された1936年からオルテガがその生涯を終える1955年までを考察対象期間としている。

## 2. オルテガ研究の開始 — 桑木巖翼

日本で最初にオルテガに関する論文を発表したのは、ドイツ哲学の分野で多くの業績を残した桑木巖翼である。ここでは、日本のオ

ルテガ受容の出発点である桑木の論文についてみていくこととする。彼は1936年、「西班牙の思想家ホセ・オルテガ・イ・ガセット」<sup>1)</sup>と題する論文で、次のようにオルテガを紹介している。

しかもこの生の逸楽を最も豊富に享受し得ることは南国人の特権である。これには生は不安でもなく配慮でもなく、直ちに幸福であり至善である。南欧情熱の国たるスペインにこの生を第一義とする哲学を説くもののであることはまた怪しむに足らぬ。近頃、ヨーロッパ特にドイツにおいて名が広まっているホセ・オルテガ・イ・ガセットはすなわちその一代表者である。<sup>2)</sup>

生の重要性を説いたスペインの哲学者の名がヨーロッパ、特にドイツで広まっている点は、当時の日本を代表するドイツ哲学研究者の一人であった桑木の興味を引いたのである。当時の日本はドイツにおける哲学研究の

1) 本論考の引用に際しては旧仮名遣い、旧字体はそれぞれ新仮名遣い、新字体に改めた。

2) 桑木巖翼「西班牙の思想家ホセ・オルテガ・イ・ガセット」、p.45.

時流に敏感であった。桑木は「知の哲学に対して生の哲学を説くことは近時の一流行である」<sup>3)</sup>と論文の冒頭で述べ、その生の哲学の提唱者としてオルテガをとらえていた。

桑木はオルテガに関する論文を発表する以前に、スペインの著名な思想家、ミゲル・デ・ウナムーノを論文で日本に紹介したが、その段階ではまだオルテガの名を知らなかった。しかし、その後、ドイツの新聞でオルテガ著作の批評記事を読むことで、オルテガに対する興味生まれ、ドイツ語に翻訳されたオルテガの書物を手に入れた。そして、その書物の紹介文で当時のドイツで最も盛んに研究されている哲学者の一人として、オルテガを知ったのであった。

桑木は以上のようにオルテガにふれる契機について説明した後、ウナムーノとオルテガの比較、そしてオルテガの主要な著作のひとつである、『現代の課題』をもとにして、彼の思想解説を行っている。しかし、結論から見るにオルテガに対する評価は好ましいものではなかったように見受けられる。

オルテガの議論には学究的には異議を挟むべきものは少なくない。特に相対主義理性主義の対立の如きなお不完全たるを免れない。(中略)しかしながら私のこの論考の目的は純粋な分析的理論ではなくして、一種の時代思潮評論と目すべきものである。したがってこれに対する学究的批評を試みることは不適當であろう。しばらくこの点をおいて問わず、私はただスペインの思潮らしいものの一例を得たことを知って満足したいと思うのである。<sup>4)</sup>

以上から、桑木がオルテガの思想について、あまり高い評価を与えていないことが推測できるのではないだろうか。桑木がオルテガの『現代の課題』に対して学問的批評を試みることは妥当ではない、と考えたことはそれぞれの学問的立場の主張として理解すべきことかもしれない。なぜなら、桑木はこうした結論を導くまでに論文の大部分を割いて『現代の課題』について、丹念な検討を行ったからである。だが、上記のふたつの引用から察するに、そもそも桑木が持っていたスペインに対する抽象的なイメージがオルテガに対する正当な評価を試みる機会を失わせたと考えなくもない。情熱の国という漠然としたイメージと生の哲学を結び付け、オルテガの思想がスペインという独特な風土から生まれたかのようにとらえている点は、ドイツでもその思想が受け入れられていることを本質的には認めていないようである。また、論文の結びに「スペインの思潮らしいものの一例」と述べる一方で、どうスペインらしいのかも明確には述べていない。

オルテガの名がヨーロッパ、特にドイツで広まったとはいえ、桑木にとってオルテガはヨーロッパという大きな枠でとらえる哲学者ではなく、あくまでもスペインの枠を出ない一人の哲学者としての評価を与えたように思われる。つまり、オルテガの生の哲学という立場は一時的な流行によってヨーロッパで受け入れられている、という思いがうかがえる。なお、桑木がオルテガに関して書き著した論文は、この一本のみである。

### 3. 初期オルテガ研究 — 池島重信

日本における初期オルテガ研究は主として池島重信によって進められた。彼は、オルテガの著作の翻訳や論文の執筆など、オルテガに関する研究を短期間のうちに次々と発表し

3) 同上, p.45.

4) 同上, p.64.

た、まさに初期オルテガ研究の中心人物と言える。ここでは、池島のオルテガ研究の過程をたどりながら、何がオルテガ研究へと池島を向かわせたのか、その要因を見ていきたい。

桑木の論文の翌年、1937年には日本における最初のオルテガ著作の翻訳となる『現代の課題』が池島によって刊行された。彼は旧帝大の教員を歴任した桑木ほど著名ではないものの、法政大学を卒業後、すぐに母校の助手となり、哲学、社会学の分野で多くの業績を残すとともに哲学書の翻訳を通じて、日本における哲学研究の発展に大きく貢献した。特に、三木清<sup>5)</sup>の知的支援を受けた哲学的人間学についての研究は、後のオルテガ研究へと通じる前提となったと考えられる。

それではまず、池島のオルテガに対する評価についてみていこう。彼は『現代の課題』の「序」ではオルテガについて次のように紹介している。

ウナムーノと併称されるわがホセ・オルテガ・イ・ガセットもそうで、この透徹せる知性と繊細なる感性との思想家は既にイギリスの評論界に驚異の眼をもって迎えられ、ドイツの思想家を深く動かし、フランスの文壇にもようやくその真価が徹底するまでになっている。オルテガは歴史を決定したあらゆる芸術作品に対して行き届いた理解を示す一方、晦渋と言われているドイツの精神科学に対しても精密な知識をもっている。また深奥を誇る東洋思想への悟入があるかと思えば、感性の極致を誇るフランス文化に対する味解も容易に他の追随を許さぬものがある。しかもそこにはドイツの専門的偏狭と没趣味とを脱し、フランス風の精神的狭隘と遊戯性とを免れた自由闊達な

精神が浸透している。<sup>6)</sup>

以上がオルテガに対する評価であるが、ここからわかるように、池島はオルテガを高く評価していたようである。イギリス、ドイツ、フランス、それぞれの国の思想的特徴のすべてを兼ね備えた知的水準の高さをオルテガは有していたことがわかる。また、こうした人物評に加え、「序」ではさらに二点、池島自身の関心がオルテガに向いた理由が述べられている。

まずひとつ目は、オルテガに対する親近感であるという。池島の考えによれば、スペインは日本と同じように、地理的にも精神的にも偏った土地にあり、直接ヨーロッパの文化圏にふれていない。そのためヨーロッパに対して、両国は第三者的視点で観察することができる。地理的に偏っている点で日本とスペインが同じであるという点はよく言われる、ピレネーの向こうからがアフリカである、ということが由来しているのであろう。一見すると、ヨーロッパと陸続きになっているスペインだが、フランスとスペインの間にあるピレネー山脈を隔てて、ヨーロッパとアフリカに分ける嫌いがあった。この視点で島国である日本と「アフリカ」のスペインは同じようにヨーロッパの文化圏にふれていない、というのである。一方、精神的に偏った、という部分に関して日本とスペインが同じであるということには池島の説明が述べられていないため、厳密な解釈は難しい。だが、いずれにしても重要なことは、池島は日本とスペインを重ね合わせるという着想を持った点にある。共通した国、スペインの思想家が何を想うか、親近感とも

5) 池島と三木との関係については、高橋彦博「東京社会科学研究所の社会実験」(『大原社会問題研究所雑誌』479, 1998年, pp.1-21)を参照されたい。

6) 池島重信訳『現代の課題』, p.2.

言うべきこの発想がオルテガに対する関心を大きく増幅させたと推測させる。

ふたつ目は、オルテガが『現代の課題』で展開した表現方法である。周知のとおり、難解な言い回しを用いないオルテガの文章<sup>7)</sup>は、「共通」した国、日本の池島に大きな衝撃を与えた。なぜなら、当時の日本の哲学書の文章は極めて難解であることが当然であり、その分野の専門家でなければ容易に近づくことができなかつたためだ。スペインに対して、親近感を覚えていたにもかかわらず、そこから出てきた哲学書の常識とは正反対のなめらかで美しい文体によって書かれた哲学書について、池島は「晦渋を当然とされているこの国の哲学の書に対して、この訳書の有する意味を確信している」<sup>8)</sup>と述べている。以上、オルテガの人物評と池島をオルテガ書物の翻訳へと駆り立てたふたつの要因について検討を行った。

1938年、池島は「現代の課題」に加え、「芸術の非人間化」、「小説の考察」、そして「知性の改造」の四作品を一まとめとして、『現代文化序説』という翻訳書を刊行した。この本における「訳者序」でも、池島はオルテガの紹介を行っているが、先に取り上げた『現代の課題』の文面に新たな記述を加えている。それは哲学者、思想家としてのオルテガに、学者、ジャーナリスト、政治家の面を加わえたのであった。池島がこうした紹介を行った意図は次の文面に現れている。

この意味では、哲学の専門家、文藝の専門家、美術の専門家、音楽の専門家、政治の専門家等々、各文化領域の専門家

のみあって、文化の全体的把握の達人の殆んど皆無と言ってよい日本の現在の思想界に、オルテガの著作はすくなからざる示唆を与えると信ずる。<sup>9)</sup>

つまり、我が国には各分野の専門家と言われる人は存在するが、それら全体を包括した専門家という存在は日本にはおらず、その意味でオルテガは真に稀有な存在であると池島は考えたのである。そうしたオルテガの著作を翻訳することにより、日本の思想界に何らかの影響を与えることを池島が願っていたことは評価されるべきであろう。同様のことは「訳者序」の最後でも述べられている。

日本文化の研究は今日あらゆる方面から盛んに行われている。この精神的状況に於いて現代文化の本質をその世界的展望に於いて解明する本書は、その豊富な独創と犀利な眼光とによって、すくなからざる示唆をもたらすことを、私は信じている。<sup>10)</sup>

このように池島がオルテガの著作を翻訳した目的は、哲学や社会学といった個別の学問、分野の発展を意図したものではなく、文化の向上を目的としていた。そして、その文化の発展には幅広い展望から取り組むことが重要であると考えたのであった。つまり、日本の思想界の発展、また文化水準の発展に寄与する可能性をオルテガの著作にみたのであった。個別の学問や分野の発展にのみこだわらない池島の姿勢は、まさにオルテガがスペインの文化水準の向上のために取り組んだ姿勢と共通しているように思われる。これは同時に、池島がオルテガの思想をスペインやヨーロッ

7) 『大衆の反逆』が代表的な例であるが、オルテガの文章はスペイン国民の知的水準向上を意図して、新聞で連載されたものが多く、その意味で難解な言い回しは限定的である。

8) 同上、p.4.

9) 同上、pp.2-3.

10) 同上、p.4.

パといった地域に限定されたものではなく、日本においても通じる汎用性のあるものとしてとらえたことを意味する。

さて、池島はオルテガの著作の翻訳活動だけにとどまらず、1939年には生の哲学の立場から、現代文明の諸相について論じた評論集、『情熱の論理』を出版している。池島はその中で「オルテガが生の価値を礼賛するときはあたかもジンメル再来を思わせるものがある、決して単に知性に代わるものというようない一面性はなく、また、理性の意義を説くときには、ソクラテスの風貌をしのぼせるものすらある」<sup>11)</sup>と述べ、オルテガ思想の一端を簡潔に紹介している。また、池島はこの本の「あとがき」で自らの思想的立場について、「結局この書で一貫して私の主張というようなものになっているものは、文化において生を強調する思想であり、その場合生は情熱という基底的なものの論理によって動くという思想である」<sup>12)</sup>と述べ、生を強調する思想への共感が池島をオルテガ研究へと向かわしめたことが明確となっている。

池島は1941年、『現代文化序説』で扱った四作品に「額縁」を加え、『評論集 現代の課題』を出版したが、その中で述べられているオルテガの紹介や人物批評についてはそれまでのものと同様であった。

1954年、池島は学術誌に3ページという短い文章でオルテガを紹介する際、それまでよりも強調してオルテガの評価について述べている。まず、世界的に知られたスペインの哲

学者はウナムーノとオルテガの二人であるが、オルテガは世界的な哲学者として不動の地位を占めていると説明した。そして、オルテガが注目される理由が「哲学の不毛の地に生まれた珍しい存在という意味ではないのだ」<sup>13)</sup>と述べ、国籍をもとにしたオルテガ批評には正当性がないことを明確にしている。

そして、1955年10月18日、オルテガはその生涯を終えることになるが、その訃報を新聞紙面にて報じる役目を担ったのが他にもない、池島であった。このことは当時、池島が我が国におけるオルテガ研究の第一人者として、確固たる地位を築いていたことを示している。なお、新聞記者ではなく、大学の研究者が筆名入りでその任にあたったこと自体、筆者には興味深いことに思われる。

「“現代の賢者”オルテガの死」<sup>14)</sup>と題されたこの訃報記事は、見出し、写真、そして約六百文字分のスペースで構成されている。遠い異国の哲学者の死を報じるにはずいぶん大きく扱われている印象を受ける。それだけオルテガが日本でも受け入れられていたと解釈するのが一般的であろう。なお、記事の中ではオルテガと池島の間接的<sup>15)</sup>なやりとりについてふれられているが、このことは他の出版物では扱われていない。

#### 4. 受容の進展

日本におけるオルテガの受容は桑木に始まり、池島の研究によって少しずつ広がりを見せた。とは言っても、日本においてオルテガはまだ無名の存在であったことは残された資料数からみて明らかだ。この状況が本格的に変化していくのは1950年代からである。ここでは、桑木、池島以外の新たな研究者が現れ始める、1940年から1955年までに限定して、研究者たちがどうオルテガをとらえたの

11) 池島重信『情熱の論理』, p.100.

12) 同上, p.271.

13) 池島重信「オルテガ」, p.19.

14) 池島重信「“現代の賢者”オルテガの死」.

15) オルテガとの直接的なやりとりを記録した唯一の資料としては、小島威彦「オルテガ、マルセル、ハイデッガー — 歴訪記の中より —」(『理想』273, 1956年, pp.58-65.) がある。

かを見ていきたい。

池島が『現代文化学序説』を出版した3年後の1940年、オルテガの『愛についての省察』が堀秀彦によって翻訳された。堀は大学で哲学を学んだ後、研究者として、また評論家として多数の著作を残した。彼は同じ学問分野の池島と親交があり、『愛についての省察』のドイツ語版を池島から借り、翻訳を行った。この翻訳書の「訳者序」で堀は「オルテガの文章はきわめて華麗であり言わば気取ったものである。私はこの華麗な或は非常に垢抜けのした彼の文体を到底そのまま日本語に移すことが出来なかった。残念だと思う」<sup>16)</sup>と述べている。池島が難解な言い回しを用いないオルテガの文体に魅了されたように、堀もまた同じ思いを持ったのである。こうした思いと翻訳が満足 of いくものではなかったことが再度、翻訳を行う動機となったのであろう。1953年、堀は『愛についての省察』を『恋愛論』へと書名を変え、あらためて出版した。その「訳者あとがき」では、オルテガについて「単にスペインの思想家というよりも、ヨーロッパ全体の思想家というべき学者」<sup>17)</sup>、と紹介した後、オルテガの『恋愛論』について次のように評価している。

私はこのオルテガの恋愛論を、私のいままでもよみ得たもののうちで一ばん素晴らしいものだと思います。私の訳文が下手なために、オルテガの文章の香り高い調子をそのまま到底うつすことはできませんでしたが、恋愛という誰でもが一度は経験する精神と肉体の根本的な動揺、い

や高ぶりを、これ程、美しく、しかも正確冷静に分析した本を、私はこれ以外に知りません。スタンダールの恋愛論をまっこうから反駁しながら、恋愛の持つたぐいえない神秘的な心の経過をこれ程、適確、説明しえぐり出した理論がいままで他にあったでしょうか。これは恋愛の単なる心理学でもなければ、さりとて、恋愛の心理を無視した一人の思想家の単なる恋愛評価でもありません。<sup>18)</sup>

堀は以上のように、『恋愛論』で展開されている文章表現、そして分析について最大級の賛辞を送っている。オルテガが文化全般について広範な知性を有していたことが『恋愛論』を単なる心理学や恋愛評価に終始した内容に留めなかった理由であろう。堀はオルテガの紹介について、よく述べられるように幅広い見識についてはふれていない。それは単なる学問的な見識の広さではこの種のテーマを論じることは妥当ではなく、その意味でオルテガが人間についての深い考察を行っていたことが理解できよう。こうしたことから『恋愛論』の翻訳版が持っていた意味は実は大きい。なぜなら、『恋愛論』はそれまでのオルテガの著作の翻訳とは違い、純粹に哲学の分野に関する内容だけを扱っているわけではないからである。つまり、池島が当初から述べていた、幅広い分野に深い見識のあった「オルテガ」がようやく日本においても見てとれるようになったのである。こうした動きはこの後の『大衆の反逆』などへとつながり、ますます顕著なものとなっていく。

『大衆の反逆』<sup>19)</sup>は1930年にスペインで出版されて以降、オルテガの名をヨーロッパのみならず、アメリカにまで広める契機となったオルテガの主著である。1953年、その『大

16) 堀 秀彦訳『愛についての省察』, p.5.

17) 堀 秀彦訳『恋愛論』, p.189.

18) 同上, p.190.

19) 邦訳に関しては後述のとおり、いくつかの表記があるが、本論では現在において最も一般的となっている、「大衆の反逆」を用いる。

衆の反逆』が、日本の哲学、社会学の発展に大きく寄与した樺俊雄<sup>20)</sup>、ドイツ文学の分野で多数の翻訳を残した佐野利勝の二人によって、それぞれ『大衆の蜂起』、『大衆の叛逆』という書名で出版された。なお、樺、佐野のどちらも翻訳の底本として使用したのはドイツ語版であった。

先に翻訳を刊行した樺はオルテガが大衆社会としての現代批判を多角的に行った点、そしてその批判が二十年以上を経過してますます現実的になっている点について、オルテガの叡智への驚嘆ぶりを述べている。<sup>21)</sup> このことから、この本で展開された批判が決してヨーロッパやアメリカだけで有効であったのではなく、当時の日本社会の現状と照らし合わせても効力のあるものだったことがうかがえる。

一方、佐野はオルテガの批判を日本の現状と重ね合わせ、より身近なものとして受け取った。そのことは次の箇所から見てとれる。

ここに述べられている厳しい批判は、言うまでもなく西洋文明に向けられているのであるが、だからといって、東洋が忘れられているのではないかなどとは言って貰いたくない。ことはわれわれ自身の問題なのである。この本の中で放たれている数々の鋭い攻撃の矢は、ひとつひとつが我が国の現状に向けられているのだと言っても決して過言ではないのである。世人はよく「戦後の混乱」と言うが、それは決して一時的な現象ではなく、その禍根は実に深いところにあることをわれ

われは本書によって学び得るだろう。わが国では今日、いたずらに外部からの圧迫に対するレジスタンスの声ばかりが強い。しかし、一民族の生命が容易に外的圧力のみによって奪われ得るものでないことは、歴史がこれを証明している。恐るべきはむしろ内部崩壊であろう。にも拘らず、刻々に内部より崩れつつあるものに対する抵抗の声があまりに希薄なのは何故であるか。しかも、これこそ真に「抵抗」の名に値するものではないか。西欧文明は危機に直面している。しかし、危機のなかにあるのは何も西欧だけではない。そして西欧には、オルテガのような思想の闘士が、少なくともいるのである。この書物の翻訳を思いついたのも、このような自らの反省に資せんがために他ならない。<sup>22)</sup>

以上のとおり、佐野はオルテガの厳しい批判を自分たちへの批判として受け止めている。その際、佐野の思想の基底となっていたものが敗戦後の日本社会であったことは明らかである。つまり、佐野は敗戦後の日本と危機に直面している西欧との間を結び付け、同様の立場として捉えていた。そうした同様の立場にありながら、奮闘しているオルテガの存在に大なる刺激を受け、オルテガの如く社会に対して警鐘を鳴らす活動が翻訳へと結びついたのである。こうしてみると『大衆の反逆』は佐野にとって、敗戦後の日本がいかにして立ち直っていくべきかを示唆する書となっていたと考えられる。とすれば、『大衆の反逆』が果たした意義に日本独特な一面が加えられることになるだろう。

樺と佐野が翻訳書を出版した同年、倫理学、哲学の分野で多くの著作、翻訳を残した研究

20) 樺訳版の「訳者あとがき」によれば翻訳は西村勝彦が行ったものに樺が手を加えたとの説明があるが、著書の訳者として樺の名だけが記されている。このため、樺のみを翻訳者として扱った。なお、西村は神戸大学の社会学者であったが哲学の分野を歩んでいなかったため、樺に翻訳を託したと推測される。

21) 樺 俊雄訳『大衆の蜂起』, p.255.

22) 佐野利勝訳『大衆の叛逆』, pp.269-270.

者、広瀬京一郎がオルテガの『大学の使命』について、「現代文明の危機と大学の使命—オルテガの所論から」という論文を発表した。広瀬の論文は主に大学論について私論を交えながら扱ったものであるが、堀の『恋愛論』と同様、オルテガの幅広い知性を日本に紹介したという点で意義深いものであった。つまり、広瀬の論文は『大学の使命』について扱った日本で最初の論文となる。こうしてまたひとつ、オルテガの幅広い思想領域が明らかとなった。

1954年、オルテガの『危機の本質』が前田敬作によって翻訳された。前田は多くの翻訳を残したドイツ文学研究者で、先に挙げた佐野の友人であった。彼は翌年にもオルテガの『技術とは何か』の翻訳を行っている。前田は『危機の本質』に付した「あとがき」でまず、スペインについて次のように述べている。

かつての黄金時代をかざる最後の偉大な思想家スアレス以後、一人のまっとうな哲学者も輩出せず、完全に不毛の地であったスペインの思想界が、オルテガの超人的な努力によって、いまやヨーロッパの最も高い水準にまで達したのである。（中略）スペインはもはや浪漫的回想とカルメン的熱情の国ではない。<sup>23)</sup>

この記述から理解されるように、スペインに対する評価は戦前と大きく変わり飛躍的に高まっていたようだ。しかもそれは、オルテガの尽力によるところが大きい。前田はこのようにスペインの変貌について述べた後、オルテガの名がまだ日本で広まっていないことについても独自の観点から言及している。前田によれば、そもそも「オルテガは、わが国ではまだほとんど本当に問題にされたことが

ない。（中略）このことは、思想というものがわが国では依然として不毛であることの悲しい証左であるかもしれない<sup>24)</sup>と考えていた。オルテガの名が日本で広まっていないのは、言葉の問題や学問分野の違いなどによるものではなく、オルテガの思想を理解できるだけの土壌が育まれていないからであり、そんな日本の現状を前田は憂いていたのであろう。

前田がなぜ思想を重視したかについては、『技術とは何か』の「あとがき」で詳しく述べられている。すなわち、敗戦後の日本は生活を再び立て直すという課題に直面していたが、この課題は物質的、経済的な面での復興だけではなく、精神的、文化的な面でも達成されなければならない。そもそも、「われわれの文化的荒廃は、決して戦争とともにじまったものではなく、それよりもっと以前からはじまっていた<sup>25)</sup>」と前田は考えていたからである。こうした理由から思想に重きを置いたのである。

前田は以上のようにオルテガの思想が広がっていない日本の思想界への批判を行ったが、もう一点、当時の哲学への批判をオルテガの哲学と比較して述べている。

オルテガにおいては、哲学と歴史と批評が一つになっている。かれにおいて哲学がふたたび批評となったのである。批評としての哲学—オルテガ哲学のこの批評性こそ、かれの思想が現代にたいしてもつ最も重要な、最も積極的な意味でなければならぬ。また、かれが「哲学の王国」ドイツにおいて異例の高い地位をあたえられているのも、この生産的な批

23) 前田敬作訳『危機の本質』, p.152.

24) 同上, p.152.

25) 前田敬作訳『技術とは何か』, p.143.

評的性格のゆえにほかならない。<sup>26)</sup>

前田によれば我が国では、当時は哲学と歴史と批評がひとつになっていなかったために、哲学は言うなれば、机上の学問としての意味しか持っていなかった。しかし、哲学は本来、人間の歴史と切り離して考えるものではなく、また人間への批評も哲学と歴史の検討から放たれるものでなければ本質をつくことはできない。哲学と歴史と批評がひとつとなって、哲学は本来の「生きた哲学」<sup>27)</sup>へと戻るのである。このように前田は現実の問題の批判を通して、人々にオルテガの思想を訴えた。こうした点は他の研究者たちと一線を画すのである。

## 5. 結論に代えて

1936年に始まる日本におけるオルテガ思想の初期受容について、このスペインの哲学者に対する研究者たちの記述をもとに、その特質を浮き彫りにすべく考察してきたが、最後に、この過程で明らかになった点を要約して本論考の結びとしておきたい。

まず、要因として挙げられるのは、ドイツでのオルテガの評価である。この当時、日本での哲学研究は「哲学の王国」と評されたドイツ哲学の研究が主流であったため、そのドイツでオルテガが高い評価を受けていたということが研究者たちの興味を喚起した。このことは、オルテガを紹介した多くの研究者がドイツでの評価について言及したことに現れている。また、オルテガがドイツで評価されていたことがオルテガの著作がいち早く、ドイツ語へと翻訳されることにつながり、日本でオルテガの著作にふれる機会へと結びついたことは大きい。これがドイツ語を介さず、

原語であるスペイン語から日本に導入されたのであれば、日本でのオルテガの受容にはより多くの時間を要したに違いない。

そして、オルテガ自身に視点を移せば、彼の持っていた思想の広がりも大きな要因である。学問的にみれば、オルテガの思想は哲学の分野だけに偏ったものではなく、幅広い分野に深く思慮を巡らせた思想であったため、哲学以外の分野の人々も引きつけた。その幅広さ、深さについてはすでに先述したとおりである。また、本論考でもすでにふれたように、思想を表現する際に用いた彼の卓越した文体にも人を魅了するものがあったことを忘れてはならない。

最後に、日本の社会事情もオルテガが日本で受容されたその要因となろう。戦前では池島が、戦後では佐野が指摘した、日本の思想界の人材不足は新たな思想の渴望へとつながり、その答えのひとつをオルテガに求めたのである。また、『大衆の反逆』でオルテガが批判したように、人々の内部からの崩壊がヨーロッパ、アメリカのみならず日本でも起こっていたことがオルテガの批判に耳を傾けることへとつながったのである。つまり、オルテガが適確に批判した社会現象は日本においても的を得たものとして受け入れられた。特に佐野のように、自分たちへの批判としてとらえ、オルテガの如く社会に対して警鐘を鳴らした者もいた。哲学が本来、人間についての学問であることに鑑みれば、哲学を基底に組み上げられたオルテガの社会批判が日本でもその有効性をみせたことは当然のことであろう。

26) 前田敬作訳『危機の本質』, pp.155-156.

27) 同上, p.155.

【参考文献】

- 本論で対象としたオルテガ作品の翻訳書
- 堀 秀彦訳『愛についての省察』実業之日本社、1940年.
- 堀 秀彦訳『恋愛論』みすず書房、1953年.
- 池島重信訳『現代の課題』刀江書院、1937年.
- 池島重信訳『現代文化學序説 現代思想全書15』三笠書房、1938年.
- 池島重信訳『現代の課題：評論集』実業之日本社、1941年.
- 樺 俊雄訳『大衆の蜂起』東京創元社、1953年.
- 前田敬作訳『危機の本質』創文社、1954年.
- 前田敬作訳『技術とは何か』創文社、1955年.
- 佐野利勝訳『大衆の叛逆』筑摩書房、1953年.
- 本論で対象としたオルテガ研究等
- 広瀬京一郎「現代文明の危機と大学の使命—オルテガの所論から」『世紀』46, 1953年, pp.32-37.
- 池島重信『情熱の論理』三笠書房、1939年.
- 池島重信「オールテガ」『理想』253, 1954年, pp.19-21.
- 池島重信「"現代の賢者"オルテガの死」朝日新聞、1955年10月21日朝刊.
- 桑木巖翼「西班牙の思想家ホセ・オルテガ・イ・ガッセット」『丁酉倫理会倫理講演集』403, 1936年, pp.45-64.